

# 本よみうり堂

神々の宿る自然、祈りを捧げる人々、豊饒な芸能。一族が集う祭には、この世とあの世が同居する。ヤマトの写真家は沖縄の地を踏み、一冊の作品を結実させるのに40年の歳月をかけた。



石垣島(石垣市)のソーロン(精霊)・アンガマ(先祖供養の祭祀)小松健一撮影

前半は琉球の海や山、市場など日々の暮らしが極彩色で活写され、独自の文化に彩られた島の佇まいに魅せられる。一転、後半はモノクロームの世界に。米軍基地前のデモ、戦闘車両の轍が刻まれ

## 小松健一著「琉球 OKINAWA」

る干潟、怒りと悲しみを無言でのみ込む人々の眼差し。基地問題に翻弄され続ける島の姿は、観光地としても消費される美しき「琉球」とパラレルワールド。まばゆい光と深い影の織りなす世界は言葉よりも雄弁だ。

ことし沖縄返還、本土復帰から50年。何がどこまで返還され、何が復帰したのか。そんな根源的な問いを、深い皺の刻みこまれた島人の相貌は投げかけてくる。終戦の日まであと二月。沖縄慰霊の日、ヒロシマ・ナガサキそして各地の空襲と、77年前に思いを馳せる夏が巡ってくる。(本の泉社、7000円)評・堀川恵子